



図125 館跡の位置
5万分1地形図「弥彦」

和納館跡 西蒲区和納

和納館跡は、JR越後線岩室駅の東側、標高五メートルの自然堤防上にある。西三〇〇メートルを西川が流れている。館跡のある場所は通称「館ノ内」と呼ばれ、天正八（一五八〇）年の上杉景勝の書状に記される和納館の推定地として古くから知られていた。現在は宅地や水田になっている。

平成六（一九九四）年、宅地開発に伴って、新潟県教育委員会が試掘調査をし、堀と考えられる溝や中世の土器などが見つかった。これを受けて翌年に、岩室村教育委員会が二六〇〇平方メートルを発掘調査した。

調査では二重に巡る堀の一部が確認された。外側の堀は幅約二メートル、深さ約一・二メートルで、底はU字形の所が多かった。内側の堀は幅が五〜七・八メートル、深さが約一メートルで、底は平らであった。堀で囲まれた館の中からは、明確な建物の跡が復元されなかったが、柱穴のような用途不明の穴が多数あり、井戸が四四基見つかった。出土遺物は、多量の中世土器のほかに、漆の塗られた椀や皿、貨幣や短刀、曲物・串・蓋・下駄・舟形・刀形・橋脚などの木製品、砥石、石臼、土錘など豊富な内容であった。これらの年代は、十三世紀後半から十六世紀後半の約三〇〇年間にわたる。図一二七は、井戸から出土した漆器の椀の一つである。



図126 上から見た発掘区



図127 漆器の椀

口径は八・五センチメートルで、内面は赤漆一色、外面には黒漆の地に赤漆で模様を描かれている。中世には、古代の素焼きの碗わんに代わり、木製で漆塗りの椀がよく使われた。

上杉景勝の書状により、和納館は、中心部の「巢城」(本丸)のほかに「二ノ廻輪」(二の丸)があり、大規模な館であったことが分かる。発掘調査区域は、このうち「二ノ廻輪」の一部と推定され、館の中心部は調査範囲の南側(図一二六の左側外)にあると考えられている。

上杉謙信の没後、養子の景勝と景虎との間で後継者争いの「御館おたての乱」が発生した。和納館の城主伊豆守いずのかみは景虎方について戦ったが、天正八(一五八〇)年、景勝方の天神山城主小国氏などに攻められ、和納館は陥落した。その後、和納館が再建されることはなかった。